

認知症高齢者の生活機能維持と介護負担軽減のための口腔ケア実施と効果の報告

特別養護老人ホーム竜爪園

渋谷あゆみ, 春田直子, 瀧浪千恵, 森野智子

要旨

超高齢社会を迎えた我が国において、要介護高齢者の重度化は大きな課題である。また、なかでも認知症については大きな社会的関心を呼び、医学的のみならず社会的にも解決すべき緊急課題の一つになっている。そこで、認知症高齢者の生活機能維持と介護負担軽減のために認知症口腔ケアに取り組みその効果をまとめ報告する事は、現在の介護老人福祉施設入所者・職員にとって意義があると考えた。今回、認知症高齢者に音波ブラシで歯みがきを実施し、介護職員に対し介護負担感を比較するためアンケート調査を実施した結果、音波ブラシで歯みがきを実施すると介護負担が軽減した例が認められた。

【目的】

認知症高齢者に、音波ブラシを使用することによって、認知症高齢者の生活機能を維持し、施設職員の介護負担が軽減する効果を調べた。

【対象および方法】

介護職員が要介護高齢者に対して1日2回音波ブラシ(ソニックケア®)を用いて1回2分間の歯みがきを行った。介護職員の介護負担感を介入前後で比較するため、介護職員に対し月1回アンケート調査を実施した。

1. 対象者

本調査の対象者は、介護老人福祉施設在住の認知症高齢者4人と介護職員38人である。

高齢者 A

76歳、女性、要介護度4
脳梗塞、高血圧の既往あり
MMSE 3点、VI 3点
BMI 20.1、MWST 5

高齢者 B

76歳、男性、要介護度4
脳出血、高血圧の既往あり
MMSE 3点、VI 7点
BMI 20.2、MWST 3、

高齢者 C

84歳、女性、要介護度5
脳出血、高血圧の既往あり
MMSE 1点、VI 6点
BMI 19.6、MWST 3

高齢者 D

78歳、女性、要介護度5
MMSE 評価不可、VI 4点
BMI 18.7、MWST 3

(MMSE: Mini-Mental State Examination = 認知機能検査 30点)

(VI: Vitality Index = 意欲の指標 10点、)

(BMI: Body mass index = 体格指数)

(MWST: Modified Water Swallow Test = 改訂水飲みテスト 5点)

2. 調査期間

調査期間は、平成21年9月～平成22年2月である。

3. 調査項目

介護職員38人に対し、入浴、排泄、食事、口腔ケア、会話の項目についてアンケート調査を実施した。

0点: とても負担

1点: どちらかといえば負担

2点: どちらかといえば負担でない

3点: 負担でない

4. 分析方法

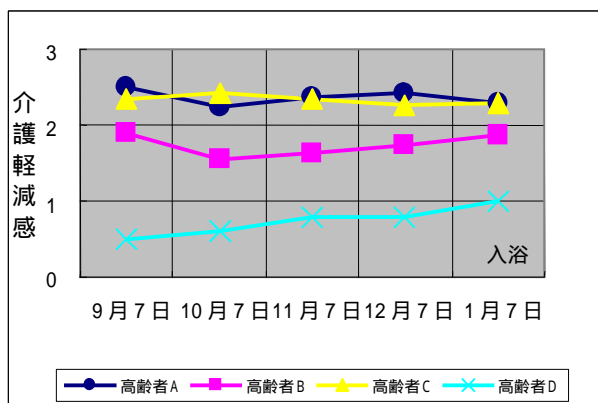
アンケート結果については t 検定を行った。
有意水準は 10%未満とした。
(t検定: 帰無仮説が正しいと仮定した場合に、統計量が t 分布に従うことを利用する統計学的検定法)

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として各入所者に対して研究概要と個人情報保護について説明し, 施設の運営会議で調査の許可を得た。

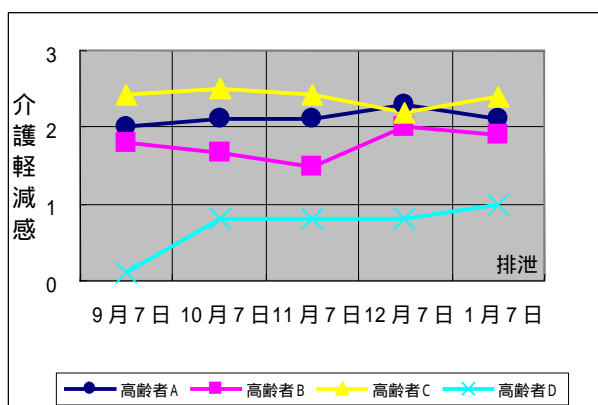
【結果】

1. 介護軽減感(入浴)



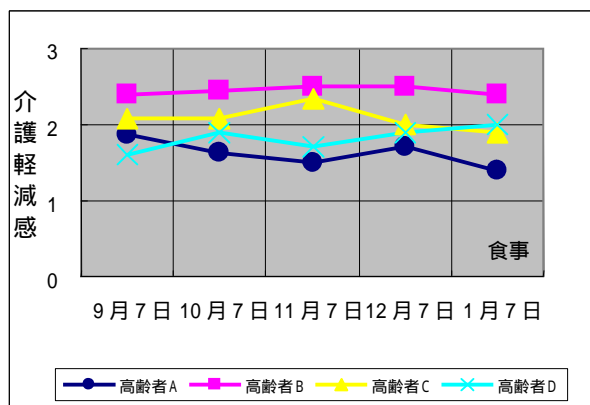
× : 9月 ~ 1月 (P < 0.1)

2. 介護軽減感(排泄)



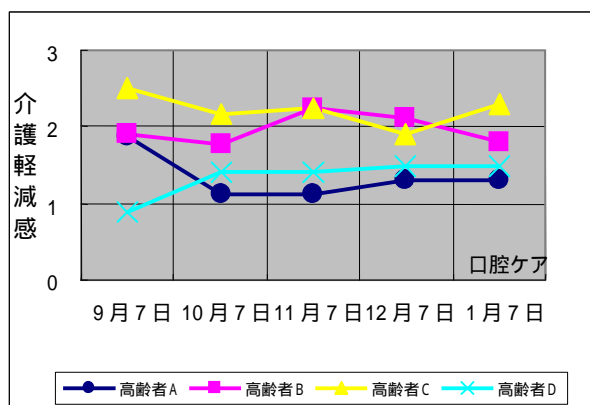
× : 9月 ~ 10月 (P < 0.05)
9月 ~ 11月 (P < 0.01)
9月 ~ 12月 (P < 0.01)
9月 ~ 1月 (P < 0.01)

3. 介護軽減感(食事)



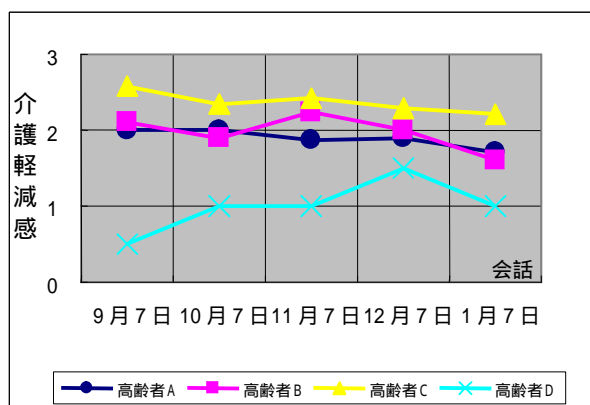
× : 9月 ~ 12月 (P < 0.1)

4. 介護軽減感(口腔ケア)



× : 9月 ~ 10月 (P < 0.1)
9月 ~ 11月 (P < 0.1)

5. 介護軽減感(会話)



× : 9月 ~ 11月 (P < 0.1)
9月 ~ 12月 (P < 0.01)
9月 ~ 1月 (P < 0.1)

高齢者 D の排泄、口腔ケア、会話において有意差が認められた。

【考察】

認知症高齢者に音波ブラシで歯みがきを実施した結果、対象者 D においては排泄、口腔ケア、会話において介入前後で有意差が認められた。これは、音波ブラシの振動（毎分 31,000 回転）によって脳が刺激され覚醒している時間が増加したためだと推察される。また、対象者 A～C においては介護職員の負担感に有意差は認められなかったが、対象者がうがいができるようになったり、発音が聞き取れるようになったり、食事の際麻痺側から食物が流れ出ることが少なくなったという介護職員の意見を聞くことができた。

【結論】

認知症高齢者に音波ブラシで歯みがきを実施すると、認知症高齢者の生活機能が維持できる可能性と、介護職員の介護負担感が軽減する可能性が示唆された。

なお、本研究は静岡県社会福祉協議会「社会福祉事業振興のための助成事業」により行った。

【謝辞】

本研究に際し、ご指導頂いた静岡県工業技術研究所の櫻川智史様に感謝いたします。

【文献】

- ・中谷陽明, 東條光雅: 家族介護者の受ける負担～負担感の測定と要因分析～, 社会老年学 29:27～36
- ・堀 洋道, 松井 豊: 心理測定尺度集 335～341